

# 人 堯 の 禍 福 的 運 命

～ その四 ～

～ カトリックの教えによる人堯の禍福的運命 ～

## Human Eternal Destiny

～ Part 4 ～

～ Catholic Doctrine of Human Eternal Beatitude or Perdition ～

霧 島 怜

Rei S. Kirishima

### 目 次

序

1. 唯一神の無償恵愛と人間の創造
2. 三位一体的唯一神の人格的肖像
3. 人類始祖の最初の境遇と神の特別な恩寵
4. 始祖の試行錯誤的「自己神格化」と人類の「原罪性」
5. 人間, その靈魂, 本然性質とその禍福的性向

註

## カトリックの教えによる人堯の禍福的運命

序

イエズス・キリストとその「愛神愛人」の道に魅せられ、生涯を通じて真理と自他永福の追求に全身全霊を尽くした正伝キリスト教の諸聖人と諸学徒、特に最大の神学者と哲学者である聖トマス・アクィナスの教示に真心の耳を向け、現代社会の現実を背景に人堯の天然目的、意味とその生き方の禍福的な性向を再考する。彼が『神学大全』の中で丁寧に論篤する人間の創造とその本義、万人の天然性質とその根本徳力、神・キリストと人間との相互関係、人生の目的、禍福的性向、人の使命とその価値、死の真相、死後の運命（特に神の恵愛と正義）と個人の生き方の役割に焦点を絞り、やや独自の心眼をもって説示する。

### 1. 唯一神の無償恵愛と人間の創造

キリスト教正伝の諸学派は『旧約聖書の創世記』が伝えている人類の創造を人間創造論の主軸と

する。創世記は人類の出現に関わる重要な事柄を次のように伝えている。

『神は天と地をつくられた。それが始まりであった。…神はこう仰せられた、「われらに似せて、われらにかたどって人間を造ろう。そして、海の魚と、天の鳥と、家畜と、野の獣と、地に這うもののすべてをこれに司らせよう」と。神はご自分にかたどって人をつくりだされた。人間を神のかたどりとし、男と女につくりだされた。神は人間を祝福して仰せられた、「生めよ、増えよ、地に満ちて、地を支配せよ。海の魚と、空の鳥と、家畜と、地に這う生き物を司れ」と。…神はご自分のつくりだされたすべてのものを眺めわたされた。これをよしとして満足された。こうして、夕べとなり、朝となった。これが六日目である』。さらに、旧約聖書の別伝が最初の男女の創造をこう語っている。『主なる神が地のちりをとって人間を形づくり、鼻の穴に命の息吹を吹きこ込まれた時、人間は生きる者となった。…それから主なる神は仰せられた、「人間が一人きりでいるのはよくない。私は彼に似合った助け手を与えよう」。主なる神は地から野の獣と…を人間 (*adducit ea ad Adam*) のもとに連れてゆかれた。(アダムは)野の獣と、…に名をつけたが、人間に似合った助け手はまだ見つからなかった (*Adam vero non inveniebatur adiutor similis eius*)。その時、主なる神は人間 (Adam) を深い眠りに入らせた。神は人間 (Adam) のあばら骨の一本を取りだし、肉をもとのように閉じた。主なる神は人間 (Adam) から取りだした肋骨で女をつくって、それを人間 (Adam) のもとに連れてゆかれた。その時人間 (Adam) は言った、「わが骨の骨、わが肉の肉。これを女と名づけよ (*haec vocabitur virago*)、男から取りだされたもの [というよりも「男の相手」] なのだから」。だからこそ、人間 (男) は父母を離れて女とともにになり、二人は一体となる』<sup>(79)</sup>。

唯一の神は内外的に100%自由な意志と無償恵愛の故に自らの存在とその活動の喜びを分かち合いたかったから即成的な御言葉をもってこの絶大で精妙な物質界と植物界を創造し、養生し続けているのである。そして、生きること、活動する事と感ずることを味わわせるために種々の動物を出現させた上、自らの無始永遠の幸福、無尽無限で絶美と神秘の極まりない徳力を一層明確で弘深に示現するために『ご自分 (我々) にかたどって人間をつくり、…男と女とにつくりだされた』。更に、純粹に靈質的な存在者 [*ens puramente spiritualis*] である天使達 [*angeli*] も創造されたのである。カトリックの天使観は本論の主題ではないが、天使の存在、本然性質と人間界における彼らの役割について聖トマスの見解を簡潔に述べておく。天使達が自己存在の因を自らの内に持っているか他に依存しているか、永遠このかた神によって創造されたか、それとも宇宙万物の前後に創造されたかについて聖トマスはこう述べている。

『天使のみならず、神以外のものはすべて神によって造られたのであると言わなくてはならない。けだし、ひとり神のみが自らの存在 (*Ipsum Esse per se et a se existens*) であるのであり、他の全てのものにおいては〔万我と〕事物の本質 (*essentia entis*) とその存在 (*ens per suam existentiam*) とが異なるのである。…他のすべてのものは分有による有 (*entia per participationem*<sup>2</sup>とは左の和訳よりも「神の存在に依存し、その存在に参ずる」) たるのでしかない。然し、分有によってあるところのものはすべて本質によってあるところのものによって原因されるものである。…だからして、天使が神によって創造されたものであることは〔彼らの性質から観て〕必然である。…永遠このかた存在 (*existentia ab aeterno*) するところのものは、ひとり「御父」と「御

子」と「聖霊」との〔三位一体の〕神を措いてほかにはない。このことは、即ち公教的信仰が疑うことなく堅持するところであり、これに反対の事柄はすべて異端として斥けられなくてはならぬ。神は被造物を産出し給うた仕方はまさしく、それらが無から、つまり〔神以外に〕何も存在しなかったその後につくり給うたのである (*ex nihilo Suoi et subiecti*)。…この点をめぐって聖学の学匠たちの間に二通りの見解が見いだされるが、その内然し、「天使達は物體的な被造物と同時に創造された」とする見解のほうがより真実に近い蓋然性を持つように思われる。けだし、天使たちは宇宙の或る一部分に過ぎず、彼らは、すなわち自分たちだけで一つの宇宙を構成しているわけではなく、天使たちも物體的被造物もがともにあいまって一つの宇宙を構成しているのである。…いかなる部分も、然しながら、その全体を離れては完全ではない。…その反対（つまり、天使達は物體的な宇宙に先だって創造されたという見解）もまた謬説と考えるべきではない』<sup>(80)</sup>。

『神学大全』の中で聖トマスは天使達の実存を疑うのではなく、彼らが唯一神の卓越性、神秘性、靈質性と全能を一層明確に顕現する存在者であると主張する。彼は天使達を、一切の現象界を全面的で100%に隔越する「神」の如き存在ではなく、人間より遙かに「神に似ている」非物質的で非物體的な者と見なし、融合的な有、複合体や合一体としてではなく、個性的な純靈（純靈的な存在者）として理解する。そして、天使達が不複合的で純靈的な実体者である以上、現象界的な意味で自然で必然的に不死不滅であるが、その不死不滅性も神の無償恵愛に由来する恩寵である。さらに、彼らは悟智と認識、意志とその自由、愛、幸福、善美、栄光等の徳力において、人間だけではなく他の存在をも遙かに超越するが、あくまでも個性を有する被造有である以上、邪悪的な行動の可能性をも孕んでいる。そして、聖書は或る天使達が神に対して反逆の姿勢を採ったから神によって罰せられたと語るし、聖トマスもこれを認めて論述する<sup>(81)</sup>。一方、人間より上位の存在者である天使たちは神の御摂理の秩序により下位にある人間の理知を照らしたり曇らせたり、人間の意思に欲求や説得という型で働きかけたり、その感覚を鈍鈍したり、又夢等を通じて上位の啓示を伝えたり、人の想像力や表象力を動かすことが出来る。さらに、天使達が神の啓示を伝えるためや様々な奉仕をするために派遣されることもあれば、人間を悪や害から守護するため又は神の特別な御計らいを遂行するために遣わされることもある。又、人間は善き天使達だけではなく、「悪魔」や「悪霊」と呼ばれる悪しき天使達の介入、誘惑や攻略を受けることもあるということについて聖トマスはこう述べている。

『悪霊達の攻略 (*impugnatio*) ということをもめぐって我々は二つの事柄を、即ち攻略そのものと攻略の秩序づけを、それぞれ区別して考えなくてはならぬ。攻略〔つまり誘惑、策略や偽善等の種々〕ということそれ自身について言えば、それはもとより悪霊達の邪悪に発するものなのであって、彼らは、すなわち嫉みのために人間の進歩を妨げようと努め、又傲慢のために神の権能の似姿を借りて人間に対する攻略のための或る一定の奉仕者達を自らに配し、あたかも（善き）天使達がそれぞれ一定の任務において人間の救いのために神に奉仕する如くたらしめる。…悪しき天使たちが人間に攻略を加えるのは二通りの仕方がある。一つは罪を教唆するという性質のもの。この場合、彼らは神によって攻略に遣わされているわけではなく、ただ時として神の正義の裁き (*iusta iudicia*) に従ってこれの許容されることがあるに過ぎない。時としては、然し、

罰するという意味でかれら人間を攻略することもある。…罰 (poena) は神を第一の創始者として究極的にはここに帰するのだからである。…罰せんがために遣わされる悪霊たちも、彼らが罰するにあたっては派遣の意図とは別な意図を以てする。彼らは、すなわち憎悪とか嫉みから罰するのである。彼らが神によって遣わされているのは神の正義〔の執行〕のためである。…悪魔は最初の人間 ( $\text{Adam}^{\text{と}}_{\text{Eva}}$ ) を罪に唆かしたのであり、この人間の罪から全人類においてすべての罪への一種の傾向性〔悪趣性〕が生じたのだからである。…悪魔は決して全ての罪の因たるのではない。なぜなら、必ずしも全ての罪が悪魔の教唆によって犯されるわけではないのであり、その或るものは〔人の〕自由意思に基づく。…「悪魔は人間を何らかの真の奇跡によって誘惑することが出来るか」〔という問いに対して聖トマスはこう答える〕。本来の意味で解されるならば、…奇跡を行ない得るのはひとり神のみである。けだし、…時としては、奇跡とは〔一切現象界の諸能力を超越する出来事としてよりも〕広義に「人間的な機能や考察を超え出たことがら」とされる。この意味においてならば、悪魔も「奇跡」を行なうことが出来る。〔こうして悪魔は先ず人を魅了させ、驚嘆させた後で騙して偽善等の悪行に誘導する〕<sup>(82)</sup>。

物質的な世界の有り様とその諸道理を据えられ、地球、植物、動物、その存在と環境の万変千化の道理も整えられ、御自分に非常に似ている諸霊も創造された神はこれらの天霊を前にして『我々に象って人間をつくろう』という決意を明示されたのである。ここに言う「我々」とは多神教的な八百万の神祇を意味するのではなく、「創世記」が著された当時の西南アジア、中東と地中海周辺の礼儀語であり、支配者の意思表示の公式用語であった「威厳複数型」(plurale majestaticum) を用いて、直接に唯一神の御計画を明示すると同時に間接的に一切世界の創造主である神の三位一体的な性質、つまり「聖父」、「聖子」と「聖霊」を暗示する概念として理解されている<sup>(83)</sup>。神は「最初の人間の身体を泥土からつくられた」とは人体が絶無や現象界外のものを素材とするのではなく、人体は一切の物質界と根本的に同質的な素材から構成され、似ている徳力と性能を本有し、物質と同様の道理に循じて存在し、変成化育する物質的な小宇宙であるという事理を指示する。トマス・アクィナスによると、『人間の身体が神によって直接無媒介的に産出された』のである。それは何故かと言うと、この現象界において適切な形相が因無しに生じたり、創造されたりする事がなければ、物事は自分が有しない本性的な根本徳力を産み出したりや本性とする根本徳力を子孫に伝達しなかったりすることが誰又何ものも出来ないからである。つまり、厳密に言えば「猿人間」が存在しないし、猿の受精卵から人間が産まれる事がなければ人間の受精卵から天使、猿やチワワが一度も産出されたことはないというのはスコラ学派の太祖の立場に副った見解であろう<sup>(84)</sup>。彼は動植物の天然で段階的な進退を主張する進化論と遺伝変化を認める現代の遺伝進退説を勿論知らなかったが、それらの自然科学説が人格的な霊物一体たる人間の全部ではなく、物体的な人体のみの生成化育とその進退を説明しようとする。それも未だ十分に納得行く最終的な結論が得られない現状である。しかし、霊長類動物の身体的かつ精神的な向上発展(又は進退化)を認めたとしても、唯一神の始創的な働きがなかったということを証明する事が(出来)ないばかりではなく、その創造的働きの天然性、神秘性と卓越性が一層露顕されるのである。

神は人間が子孫を生み、人類存続の維持とその繁栄を確乎たるものとするために、アダムに自然で必然不可欠そして等しい協力者と配偶者（「我が骨の骨、我が肉の肉」、つまり「我が皮肉骨髄」と対等な者）であるエヴァを創造し、二人とその後裔に『生めよ、増えよ、地に満ちて、地を支配せよ。海の魚と、空の鳥と、家畜と、地に這う生き物を司れ』という権限を与え、万有千化の秩序とその道理に循じて宇宙の開拓と万物万事の運営を人類に任せたのである。更に、神は最初の女人エヴァの体をアダムの肋骨から形成されたという創造描写の本義について聖トマスは興味深い解説を施す。

『女人が男子（アダム）の肋骨から形成されたのは適切であった。それは第一に、男子と女人との間には社会共同体的な結合が存在するのでなくてはならないことを示すという意味。…すなわち、女人が〔人間として〕「男子を支配すべきではない」だから女人は頭から形成されはしなかったのである。だが、女人はまた、〔人間として〕男子によってあたかも奴隷的に服属する者のごとくに軽蔑されるべきではない。だから女人は足から形成されはしなかったのである』<sup>(85)</sup>。

つまり、ここは万人男女が神の子らとして、人間として、被造物として対等であり、同伴者であるという立場は断固たる真理として論説されている。更に、男女の天然で本性的と靈的な平等、対等性、身体（皮肉骨髄）価値の平等と同じ使命について創世記は少なくとも3000年前の表現をもってこう語る。

『主なる神は地のちりをとって人間（Adam）を形づくり、鼻の穴に命の息吹を吹き込まれた時に人間（Adam）は生きる者となった。…〔そして又〕主なる神は…アダムから取り出したあばら骨で女〔つまりエヴァの身体〕をつくって、〔これに命を吹き込んで〕、それを人間（Adam）のもとに連れてゆかれた。その時人間（Adam）は言った、「わが骨の骨、わが肉の肉。これを女（virago）と名づけよ、男から取りだされたもの〔というよりも「男の相手」〕なのだから」<sup>(86)</sup>。

かくして、最初の男性であるアダムだけではなく、最初の女性であるエヴァも同じく唯一神の肖像、三位一体的絶対神に似ている人格的に平等な者同志として神から人間的で個性的な生命の原動力たる靈魂が授けられ、神の無償恵愛の特別な賜物として不滅性と自由決行に順ずる禍福達成の道が委ねられ、人笥の正善的な性能も祝福されたのである。

## 2. 三位一体的唯一神の人格的肖像

全人類の始祖を意味するアダムとエヴァを初め、あらゆる時代と場所の人種、部族や国民の男女、大人、子どもと胎児が唯一の絶対神の肖像であり、男と女の関係が唯一神の三位一体的な関係にかたどられており、その関係を反映するとは一体何を意味し、具体的に何を示すのであろうか。男も女も「神の肖像」であり、「神の似姿」であるとは先ず、人は三位一体的な唯一神の分身、分霊や天使の分身又は分霊を意味するのでなければ、唯一神もしくは天使の複製品、正確な模写、レプリカ、全面的で100%の生写しやクローンであると言う意味でもない。逆に、人は生じて死に、正邪・真偽・善悪・美醜や苦楽等を体験すると言えども、唯一神も人間の太元的原型と隔越的標本として有限の存在者であり、始終的で増減的な徳力能所の持ち主であるという論理もここに成り立たない。

聖トマスは神が御自分の肖像の如く（*ad imaginem Dei*）、似姿の如く（*ad similitudinem Dei*）アダムとエヴァを創造し

たと言った際の「神の肖像」, 「神の象り」(imago Dei) および「神の似姿」, 「神の模倣」(similitudo Dei) の意味とその内実をこう説明する。肖像は似姿の意味もその内実をも既に含んでいるが、似姿のうちには肖像の全意味と全中身も本来含まれていない。肖像はその意味においても内容においても「似姿」より広大である。更に、原物とその肖像又は原型とその複製が意味においても中身(内実;性)においても本来「等しい」ものでなければ、「均等」でもなく、「同等」のものでもない。そこは類似の遠近度と高低度のみが認められるのである。よって、人間は唯一神を永遠で無限に隔越した原型とする現象的、心身的、霊物的で人格的、すなわち不完全で類似的な肖像として創造されたのである。唯一絶対神と一切世界の万我物事象のすべてが「存在」(神も被造物も実存する)の面、或る我物が「生きる」(神も或る被造物も生きるとも)という面、或る我が「霊智性能を有する」(神も或る被造物も霊知力を有する)という面、或る我物が「産む」(聖父は御)という面、或る我が「ものをつくる」(神も或る被造物もつくるとも)という面において似ているが、唯一の絶対神と被造物はその存在、生命、霊智、精神、生出、創造等の徳力性能の**本然性質とその超絶性において永遠に異なり、永遠に埋められない無限の隔たりが在る。**

よって、霊智性能を本有する天使と人間とが神の肖像と観なされるが、霊智とその能力を本有しない動植物と無機物質が神の単なる遠い似姿として理解されている。一切の被造物世界の中でその天然性質の類似性において天使達が神様に一番似ているが、我々が直接に体験し感知的に認識するこの現象界において人間よりも神に似ている存在はないと正伝のキリスト教の主流を成す最大学派スコラも一貫して保持しているのである<sup>(87)</sup>。一方、人類の歴史、取り分け二十世紀だけでも振り返って観ると、或る有名な指導者と実力者が明らかに陰湿的な凶悪と自己本位主義的や自国中心主義的な利益を社会秩序と私的人生の誇り、模範と栄光とするが、彼らが一切の善美徳を絶する無償恵愛の神の肖像どころか遠い似姿の示現であると容認する事は良心の常識を越えている事理であろう。例えばヒトラー、レーニン、スターリン、昭和皇帝、毛沢東やポルポトと彼らの冷淡で他民への憎悪感で満ちた惨殺的な組織、さらにトゥルーマン、ニクソン、フジモリやブッシュ大統領達とその嗜殺組織、政経的等のテロリストや戦犯者を英雄化し崇拜する者達、彼らの協力者と詭弁を弄する応援者が無償恵愛と不偏正義の神の「かたどりである」とは空前絶後の事理であり、荒唐無稽の説ではないだろうか？ 似たような問題を想定した聖トマスは神の肖像が如何なる人間の内に見いだされるかという問いにこう答える。

『人間〔一人一人〕が神の像のごとくであるとされるのはその知性的本性〔霊智的本性〕のゆえなのであり、...その知性的本性が最高度に神を模倣(imitari)する点にある。ところで、知性的本性が最高度に神を模倣するならば、神が神自らを知性認知し、神自らを愛するということに関する限りにおいてである。だからして、神の像が人間のうちに観られる仕方に次の三つがありうる。一つは、人間が神を知性認知し愛するということへの自然本性的な適性〔天然趨向(apertitudo naturalis)天然性向(inclinatio naturalis)を有する限りにおいてである。かかる適性は精神の自然本性そのもののうちに成り立つもの〔つまり性向〕なのあって、こうした自然本性〔の趨向〕はすべての人間に共通する。今一つには、人間は現実的に(in actu)乃至能態的に(in habitu)神を認識し愛しており、だがそれはやはり不完全な仕方においてでしかない、という限りにおいてである。...第三には、人間が〔人間として〕完全な仕方において神を現実的に認識し愛する限り

においてである。…第一像は「善悪正邪の者を問わず」全ての人間の内に、第二それは義人「つまり全霊誠意をもって「愛神愛人」の道を歩む者」においてのみ、第三のそれは至福者達「すなわち、死んで神福に参ずる者達」のみにおいて見出される』<sup>(88)</sup>。

さらに、人間は神に肖られて神の靈智的で人格的な模倣であるとは人間が神の単一で不可分的な神性の徳力だけでなければ、父性 (paternitas)、子性 (filiatio) や霊発 (spiratio) のどれかが一つ又は二つの「神格」、つまり単一神性の妙位 (persona divina) の人格的や人魂的な肖像であるのではなく、唯一神の本然で単一不可分的な性質とその徳力の根本在り方である三位一体性を類似的に示現し、その類似的な模倣である。人間性が神の三位一体性の極めて粗朴な模倣であり、遠い似姿であるという**造物の一切智を絶する神秘的な類似**について聖トマスはこう述べている。

『人間のうちに神の像の存するのは神の本性に関する限りにおいてであるし、また「神の」ペルソナの三つなる「在位性、妙位性」に関するかぎりにおいてでもある。まさしく、神そのものにおいて、やはり、一つの本性が三つのペルソナにおいて存在しているのだからである。…アウグスティヌスが「三位一体論」の第十五巻に解いているごとく、我々のうちに存するこの三「位」一「体」性 (trinitas)、神の三位一体 (Trinitas) に対する差異は極大である。…「にも拘らず」三位一体の神 (Deus Unus et Trinus) は人間を自らの像、つまり全三位一体の像の如くに造ったという風に理解すべきである』<sup>(89)</sup>。

精神と物質の一体であり、悟知的かつ人格的な靈魂と人間的な身体の一部である人の内には一体何ものが神の肖像であり、何ものが神の模倣であるかという問題に対する解答は極めて重要である。

使徒パウロを初め、使徒教会、初代キリスト教とカトリック系の世界観、特にその人間観の主流をなす教父達とスコラ学派によると、人間の物質的な面及び生物的な身体と面とその諸感覚は神の「像り」ではなく、神の極めて薄弱な**痕跡** (vestigium) であり、粗朴で貌い似姿である。それに対して、人間の精神的な次元の核心である人格的で理知的な靈魂 (人魂) は神の本然自内性の無窮無極的な神秘の中核である三位一体性の貌い肖像であり、現象界の靈物的な存在のうちで他に全く見られない程度で神の三位一体的な特性が明らかに「印ぜられている」と聖トマスは観ている。つまり男も女も、原始人も現代人もその生命の原理と原動力である人魂において神の肖像であるとは唯一神の三位一体性の根本と骨格が万代の男と女との靈魂の徳力性能として類似的に稟賦され、刻み込まれているという事である。かくて、神の無限無尽にして隔越的で神聖と神秘の窮まりない徳力とその性能の類似的な肖像である人格的な靈魂は各人の存在的な相関関係、自他の自由で認識的な意思、自他間の人格的な愛、各自の多重多様な徳力性能、自由活動とそこから自然で必然的に発生する諸々の実果という在り方をもって神の「三位一体性」を微かに思い浮かばせるのである<sup>(90)</sup>。これは私観であるが、男においても女においても唯一神の本然性質の極秘である三位一体性、特に神性の無限で隔越的徳力の主力の一つである「**創造力**」の貌い類似性は根本的に男と女との人格的な生殖性能、その性能の自由で自然かつ必然的な活現結果である子の誕生にみられる。さらに、男女と親子を自然で必然的に結ぶ相互愛の人格的な関係という天然で各人に付与されている活現力も言

うまでもなく、唯一神の神聖窮まりない三位間の愛の神秘を覗かせるのである。この人間的な生殖性能、子孫の誕生と男女及び親子の相互愛においては各自の人魂と人体およびその精神と身体との諸面が関わっているが、人体でなければ精神全般でもなく、各人の精神と身体を生かす個人的靈魂こそは各人の精神と身体との諸活動の源泉であり、発祥地であり、原動力であり、主役であると正伝キリスト教も聖トマスも一貫して主張するのである。それ等の諸能力の活現においては誤作や不活が見られる事もあるが、それは人魂性能の天然不在や天然欠陥ではなく、個人の精神的又は身体的な性能、その機能や機官の遺伝的不在、欠陥又は不足に因るものである<sup>(91)</sup>。

今一、各自の人魂は神の三位一体性的人格的な肖像である半面、その唯一無二性的人格的な模倣でもある。聖トマスがこのような表現を直接用いていないが、神の生命、その本然性質と根本徳力、特に神の完全性、単一性、永遠性、無限性、善性、悟知性、意思、意識、愛、至福、唯一性、人間の創造と人魂の諸能力について彼の論証<sup>(92)</sup>を基に考えてみると、人魂が神の**唯一無二性的人格的な肖像**であるということも疑い得ない事理として認めることが出来る。つまり、神に象って創造される一人一人が「唯一無二」の者であるとは具体的に如何なる内容を指摘するのであろうか。先ず、我々一人一人が生みの親から個人的な身体と精神を貰っているが、それを生かし、存続せしめ、人格化あらしめるのは他にない個性的な人魂である。この人魂は取り替えることも他者と交換することも貸借することも出来ないモノとして受精卵内の両核が融合する瞬間に神から直接に授けられ、もしくは神の摂理によって新しく発生する人間的、人格的、個性的で靈知的な生命力である。だから我々の身体的と精神的な徳力能所の統括力たる「人魂」およびその属性が遺伝の故に親と先祖と密接につながっている反面、人魂自体は先祖や親の靈魂の分子でなければ分霊でもなく、融合、混合や結合の結果でなければ分流したものでもなく、複製でなければクローンでもなく、進化の結果でなければ退化の結果でもないのである。各人の人魂は母親、父親や彼らの先祖の人魂から独立した天然自性を有する人格的、主体的で別個の生命力である。人魂は遺伝しないし、子の人魂は生みの親の産物でもない。生みの親は子の人魂の創造主でなければその支配者や所有者でもない。各人靈魂の天然の唯一性は主として人魂の伝達・譲渡・交換や交替の不可能性、人魂の別個性とその有始無終性（それは神の完全自由な恵愛の無償の賜物であり）、自他の感知とその認識の相互不可侵性と独占、自己意思と自己決断の自由とそれ等の意識的な独立・独占と不可介入性、生死体験の一回性、人生体験内容の独占とその譲渡の不可能性、そして何よりも「もう一人の己れ」の創生や創造の不可能性を意味するモノである。換言すれば、「私は私のこの身体に過ぎない」、「私は私をうんで育てた母親、父親、祖父や祖母その者であり」、「私は私をうんだ母親や父親の心中を今ここで完全で直接に意識しており」、「私は自分の父母の両魂の融合体等であり」、「私は私をうんだ母親や父親の子ども時代に体験した出来事や当時の気持ちが今ここで回顧している」と精神異常でない限り誰もが真面目に実感したり思ったりしたことがなければ、自覚したりや認識したりした事もないのである。

要するに、人は絶対神の肖像であり、似姿であるとは万代万人が絶対神の完全な「複製品」や100%の肖像ではなく、男も女も、成人も胎児も、皇帝もいわゆる「穢多賤民」も、ローマ法王も拒神拒仏主義者も、アインシュタインも鉄格子の部屋から月を眺める極めて重い精神病の患者も、つ



まり万代万民の靈魂はこの神の100%自由で無償の恵愛の故に神によって創造され、一人一人の靈魂のみは神の神聖で神秘等の極まりない徳力性能にかたどられて創造されているという意味である。

### 3. 人類始祖の最初の境遇と神の特別な恩寵

創世記は人類の始祖であるアダムとエヴァの最初の境遇とその環境についてこう語る。

『神は…人間を神のかたどりとし、男と女につくりだされた。神は人間を祝福して仰せられた。「生めよ、ふえよ、地に満ちて、地を支配せよ。海の魚と、空の鳥と…をつかさどれ」。また神は仰せられた、「私は地の表に生じて、種を實らせるすべての草と、…木、…野の獣、空の鳥、…すべての生き物をおまえたちに与え、…それを糧とし…」。神はご自分の創りだされた全てのものを眺め渡された。それをよしとして満足された。…それから主なる神は東のかたエデン（樂園）をつくり、そこに自分が形づくった人間（<sup>アダムと</sup>エヴァ）を置かれた。また主なる神は、見て美しく食べて美味しい実のなる様々な木、…園のずっと奥に生命の木と善悪を知る木も生えさせられた。…園を潤す一つの川が流れ出てそこから四つの流れに分かれた。…そこに黄金もあった。…主なる神は人間に掟を与えてこう仰せられた、「この園のどんな木の実も食べてよい。だが、善悪を知る木の実を食べてはならぬ。その木の実を食べたら必ず死なねばならぬからである」。…男（アダム）と女（エヴァ）とは裸であったが、二人とも恥ずかしいとは思わなかった。〔アダムとエヴァは全智全能の神の恵愛の掟を破った後に自分たちと環境内に変化が生じた。これはこう描かれている。〕主なる神は男を呼んで、「どこにいるのか」と仰せられた。「園でああなたの足音を聞きました、私は裸なので恐くなって隠れました」と男は言った。…それから（神は）女に向かって仰せられた、「私はお前の苦しみと身ごもりの数を大いに増やす。お前は苦しみつつ子を生むことになる。お前は夫に情を燃やすが、夫はお前を支配する」。それから男に向かって仰せられた、「お前は妻の言うがままになり、…お前のゆえに地が呪われる。生き続ける限りお前は苦勞して地から糧を得るであろう。地はお前〔達とその子孫〕のためにいばらとあざみを生やし、お前らは野の草を食うことになろう。さらに、お前〔達とその子孫〕は額に汗を流して、糧を得るだろう。土から出たお前〔達〕なのだから、その土に帰るまで塵であって、塵に帰るべき者だ」。…主なる神はエデンの園から人間を追い出された。それは土から出た〔肉体を有する〕人間に土を耕させるためである』<sup>(93)</sup>。

神がアダムとエヴァを御自分に象って創造した時に彼らに施された存在の様態、境遇と生活環境は人間が本有すべき自性徳力と生活環境を遙かに越えていたとキリスト教の教父達〔例えばヒエロニムスとバシリウス〕を初めアウグスティヌス、聖トマスとその後継者は揃って指摘している。彼らによると、神が自由で無償の恵愛の故に人間の本来自性を遙かに越えた徳力とその性能を始祖とその後裔に特別な恩恵として「**人間身体の不滅**」、「**苦悩のない快適な生活**」、「**神の高度理解**」と「**神との直接で親しい友情**」という賜物を賦与した。聖トマスはこれらの事柄についてこう論篤する。

『〔現象的な万我万〕物が不滅だとされるのに三様の意味がありうる。その第一は…質料がなく、天使のごとく…つまり自然本性的に不滅なるもの (*in corruptibile secundum naturam suam*)。第二には…本性

的には可滅的であるが、全く滅びということを許さないような何らかの態勢が内属する場合である。…アウグスティヌスの『ディオスコル宛て書翰』の中の言葉のごとく、「神はかくも力ある本性に魂を造り給うたのであった」。…こうした魂の不滅性の活力が〔人間の〕身体にまで溢れ出るほどに〔稟賦された〕。第三には、作動因〔つまり神の恩恵〕によってものが不滅と呼ばれる。…こうした人間を神は造り給うたのである。…人間の身体はそこに現存している何らかの不死性の活力によって不可分解的だったわけではなく、却って、彼〔つまり人間〕の魂の内に神から超自然的に与えられた或る力が内在していて、魂は自らが神への服属のうちに留まる限り、この力を以て身体をあらゆる滅びから護る事が出来たのである。…(エデン園の奥に生えていた) 生命の木は或る意味において(限定された時で)は不死の原因するものであったが、端的な意味においては、然しそうではなかったのである。(何故かと言うと、) 身体を保存するために内在するとき力が生命の木によって原因されたわけではない。〔と言っても、神は樂園に人類に恵んだ不死と不滅の境涯を永遠を通じて確保するために人体活力の「改新源」をも完備した。聖トマスは『創世記』を引用してこう続けている。自己神格化に失敗した〕「アダムとエヴァが生命の木にも手をのぼすことのないように…これを食べれば永遠に生きることになるのだ」(と神は念じた。そして、これを防ぐ手段として) 神はエデンから人間を追い出された。…そして、(天使) ケルビムと炎を放つじくごく型の剣とを置き、生命の木への入り口を見張らせられた [3章<sup>22-24</sup>]. …人間が不滅不死であったのは彼の身体が不可滅という態勢を有するものであったという意味においてではなく、却って彼の魂には身体を滅びから護るべきある力が内在していたという意味である。神は人間を樂園に置き給うたには神自身が働き、そして人間を守護する。…いま一つには、人間が働いて樂園を耕し、またこれを守護するためという風にも解されうる。…しかし、その働きは決して罪以後におけるごとく苦勞の多いものではなく、却ってそれは自然の力を経験する機会として愉快なものだったであろう。…樂園は人間を最初(で無垢)の状態における不滅性に関する限り人間の住まうにかなった場所であった。こうした不滅性は然し、(被造物たるものの) 自然本性的仕方人間に属するものではなく、〔一切世界を隔越する絶対者たる〕神の超自然的〔つまり、一切の現象的な被造物界を超越した〕賜物であった。…そしてそれは人間が魂的な生を送る期間中ずっとここに住まった上、後、霊的な生を獲得するにおよんで天に移されんがためだったのである』<sup>(94)</sup>。

人類の始祖と見なされるアダムとエヴァは神によって直接に授けられた人魂と人体の不死不滅性を基礎とした恩恵的な優遇に参じていた間に彼らの心身、特に精神が如何なる特力能所、様態と性能を有し、如何にしてそれ等の賜物を活用していたかに関するトマス・アクィナスの見解には興味深いところがある。先ず、始祖の理性、自由意志と全認識が全面的に選択と高度の自由を享受しながら神の恩恵に照らされて自然で自由、無理なく愉快地に神法、万我物事象の秩序とその諸道理に遵由し、自分たちの性質徳力を高めていたに違いない。更に、人魂の下位の諸能力も照らされた意思の正悟と真善美の道理に喜んで服し、心身の全性能も靈魂に順従しながらその活現全相においても素晴らしい調和をなしていたと観られる。さらに、始祖は自由意志とその機能を全面的に保持しな

がらも、如何なる悪意、罪悪、その心配や恐怖の影でさえ存在せず、彼らの意思と認識も自然で自由に神旨、真智、善美と誠意等に趣いてそれ等を愉快地実行していたのであろう。勿論、男女として夫婦としての関係においても高度の誠意、相愛、尊敬、信頼と平等、人間と動植物との関係においても素晴らしい調和、そして下位の現象界とその環境との関わりにおいても調和的な共存、万事理法の尊重と相互利益的な使用が維持されていたのであろう。聖書は人類を現世万物界の心身的な傑作と見なし、人間より下位の万物に対する支配権も与えられているが、それは決して人類の自己本位的、自己中心的、民族優越主義的や自国中心主義的で勝手気ままの栄利と覇権のためでなければ、他の万物森羅の存在と化育発展を無視したり、その存続を不可能としたりする人間の私利私欲や娯楽のための利用放題権や濫用権ではない。万有を愛する唯一神の特別な恩寵によって優遇を享受していた始祖は病氣や老死の苦悩もなく、間違いや迷いもなく、苦勞や失敗もなく、不安や失望の影もなく、不自由や不都合もなく、悪意や下心もなく、悔いや不信もない慶福、神との親密な友情、神の真正な理解とそこから生ずる深い安心感、心の平安と感謝の気持ちに溢れた日々を過ごしていたに違いない<sup>(95)</sup>。

#### 4. 始祖の試行錯誤的「自己神格化」と人類の「原罪性」

三位一体的な唯一神は完全に自由で無償の恵愛の故にご自分にかたどって人類の始祖を創造されただけではなく自分によりよく似て、より快適で幸せな人生を送り、その「完成」を意味する神福での永遠で意識的な参加をより安易に得るために特別な御計らいをもって人間の本性を遙かに越えた徳力、境遇とその環境を我々の始祖に恵んだのである。ところが、この始祖の後裔である万代万人の本性的な徳力性能の活用歴史、特に二十世紀の陰湿的な憎しみと復讐で満ちた殺戮、取り分けロシア赤軍、ナチス・ドイツ軍、日本皇軍、アメリカ民主主義導入軍、中華共和国の解放軍とボルボト軍によって行なわれた無差別的な多量虐殺、先進国による経済的搾取、政治的な抑圧とテロおよび常識と良心に悖る悪魔の崇拜、戦争の美化と戦犯者の英霊化の歴史<sup>(96)</sup>は聖書が語り、キリスト教が唱道している神の恵愛と恩寵の効果、人間性の素晴らしさと人類の終末的な栄光の前兆よりも、その反対の到来を予告するかのように見受ける者が少なくない。しかし、このような悲観的で絶望的な人々観は神仏の正道、すなわち永遠で絶美と神聖等の極まりない御命の活現と人間一人一人の自ら誠実で終生の心身学道（宗教生活）の正しい理解を残念ながら有しない者達の見解である。一方、敬仏慈人や愛神愛人等の如き道を真心をもって全霊全身を尽くして生きようとする者のみは唯一の神仏の慈愛的な活現、その御摂理の恵みと人類の悲劇を正しく理解し受けとめることが出来る。正伝仏教の大流をなす禅仏教、特に道元禪師が唱道する人間の本来性質、人々の禍福的運命とその実現について『禅仏教による人々の禍福的運命』という章の中で既に述べたが、ここは聖トマスが説くキリスト教の立場に副って神の御摂理、恵み、人類始祖の「神人平等視」と「自己神格化」の試み（つまり「原罪」）、その悲劇的な果報と唯一神の救済をやや独自の心眼をもって説示したいと思う。

創世記はこれらの出来事をこう描いている。

『さて、主なる神が造られた野の生き物の中で一番ずる賢かった蛇が女（エヴァ）に言った、

「《園のどんな木の実も食べてはいけない》、と神が言われたそうだが、それは本当か」。女は蛇に答えた、「園にある木の実を食べてもいいのです。ただ、園の奥にある〔善悪を知る〕木の実だけについては《それを食べても、それに触れてもいけない。そうすると死ぬことになる》と神は言われました」。蛇は女に言われた、「いや、そんなことで死にはしない。お前達はその実を食べれば、その時眼が開け、善と悪を知る天の神々のようになる〔ヴルガタ訳の聖書が、“eritis sicut dii”, つまり「あなたが神々の如き者となる」とある。換言すれば、アダムは男神となり、エヴァは女神となる〕と神は知っているのだ」。女にはその木の実がうまそうで、見ても美しく、成功を勝ち取るには望ましいもののように思えた。そこで女はその木の実を取って食べ、一緒にいた男（アダム）にも与え、男もそれを食べた。その時、二人の眼はひらき、自分達が裸でいるのが分かったのでいちじくの葉を縫い合わせて腰巻にした。さて、日中のそよ風の時、園を歩かれる主なる神の足音を聞いたアダムは妻とともに御前を避けて園の木々の間に逃げ隠れた。主なる神は男を呼んで、「どこにいるのか」と仰せられた。「園であなたの足音を聞きましたが、私は裸なので、恐くなって隠れました」と男は言った。「裸であることを誰がお前に言ったのか。さては、私が食べるなど命じたあの木の実を食べたのだな」。〔その後、アダムとエヴァはことのおこりを神様に話す。〕そこで、主なる神は蛇に向かって仰せられた、「お前は呪われたものとなろう…女の子孫はお前の頭を踏みくだき、お前の子孫は女の子孫のかかとを狙うであろう」。それから女に向かって仰せられた。「私はお前のみごもりの苦しみを大いに増やす。お前は苦しみつつ子を生むことになる。お前は夫に情を燃やすが、夫はお前を支配する」。それから男に向かって仰せられた、「お前は妻の言うがままになり、…お前のゆえに地が呪われる。生き続ける限りお前は苦勞して地から糧を得るであろう。地はお前〔達とその子孫〕のためにいばらとあざみを生やし、お前らは野の草を食うことになる。さらに、お前〔達とその子孫〕は額に汗を流して、糧を得るだろう。土から出たお前〔達〕なのだから、その土に帰るまで塵であって、塵に帰るべき者だ」。…主なる神は男とその妻に長い皮衣を着せて仰せられた、「見よ、人間は善悪を知ったので、我々のような者になった (“*ecce Adam factus est quasi unus ex nobis sciens bonum et malum*”). これから、彼が生命の木にも手をのばすことのないように願う、それを食べれば永遠に生きることになるのだ」。主なる神はエデンの園から人間を追い出された。…男（アダム）は妻（エヴァ）を知った。彼女はみごもってカインを生み、こう言った、「私は主（なる神）のおかげで一人の子をもうけた」。加えて、アベルという弟も生んだ。アベルは羊飼いになり、カインは地を耕す者になった』<sup>(97)</sup>。

拒神拒仏論者にとってこの物語は非現実的で非科学的な幻想や人類の阿片である宗教に洗脳された古代著者の妄想の産物であり、全く価値のない作り話である。無神無仏主義者、自己本位主義者や勝手気まま主義者にとってそれは古代文学の一例であり、科学的な裏づけの全くない有害な罪悪感を煽り、伸び伸びとした教育に釘を差す脅し話に過ぎない。快樂主義者にとってこの物語は「楽園」という映画のごとく興味津々たる男女の性関係における姦淫の蠱惑力、自由淫放の魅惑力とその禁断を描いた古代セックス文学の典型であろう。単なる無宗教の人々にとってこの物語は現代

人が余り興味もなく気にもしない「人間の罪深さ」や「墮落」という宗教的な概念を描くために古代人が考えた象徴的な寓話や比喩的な童話の一種にすぎない。比較宗教学者にとってこの物語は人間性に内在し深く潜んでいる善悪、正邪、義不義、応報賞罰と禍福という天然的な性向、その心理的な葛藤および社会的な対立を浮き彫りにしたユダヤ教的かつキリスト教的な問題提起とその解決の原始的な試みであろう。しかし、似非キリスト教徒や洗礼式・結婚式とお葬式だけ教会で挙げている建て前のクリスチャンではなく、終生誠実な愛神愛人の生き方を人生の正道とし、永遠神福の参加を人々の究極的目的とする正伝キリスト教の信奉者にとってこの物語は比較宗教学者が指摘する事柄を自明の事理と認めながらも、それを浅い解釈と観ている。本音をもってキリストの教えを生きようと努める者達にとってこの物語は自他の人々における神の愛、その恩恵の多重多様な活現、自分の有罪性、痛悔、罪の償いと改心の再認識を促す出来事である。この物語の内実はアダムとエヴァだけではなく、万代万人の日常生活の中で活現する神の恵愛、それを無視したり、軽蔑したり、又は拒否したりする民族、国家、政教、経済、学問や諸々の個人の反逆罪とその神格化の生々しい記録でもある。

さて、神の特恩によって人類の始祖に施された超自然的な諸能力にも拘らず思わぬ未知の勢力が蛇の形を採ってエヴァに近付いて声をかけたのである。しかし、ここで登場する「蛇」は決して爬虫類の動物ではない。この「ヘビ」とは騙すために恣に変形し、音を立てずにうねうねと身をよじらせ、敏速に左右したり、とっさに前進後退をしたりすると同時に何所かで忍び込み、何時でも毒牙でさして、誰でも命を奪う曖昧な性格と習性を本有する極めて偽善的な殺し屋、陰湿的な誘惑や騙しの達人、超現象的及び超人間的な力の持ち主、本心を明かさず本名を名乗らずに立て前を殻のごとく取り替えた後に姿を消す巧妙な詐欺師、多くの者に嫌われ恐れられ、一瞬の油断も許さない賢い悪徳者、悪魔の化身である。さらに、この偽善的勢力と機敏な狡猾を避けるために宥めすかされ、崇拜される神聖にして侵すべからず畏れ多い存在、悪徳指導者を意味する語である。そう言った生き物は自らの正体と本性を明かさないうままでエヴァに近寄り、神への敬忠を込めて、神がなさるはずのない禁止令のことを心にかけ、始祖が置かれた立場に同情の念を示し、神令の内容をさりげなく拡大しながら彼女に問いかけて言った、「園のどんな木の実も食べてはいけないと神は言われたそうだが、それは本当か」。エヴァは自分の名を名乗らない親友が繰り返している神の禁止令の内容を丁寧に訂正するのはするが同時に神の禁止令にない言葉を勝手に加えてこう答える「園にある木の実も食べてもいいのですが、園の奥にある〔善悪を知る〕木の実だけについては<<それを食べても、それに触れてもいけない。そうすると死ぬことになる>>と神は言われた」。

自らの正体を明かさないうままで極めて偽善的で陰湿的な大嘘つきはどうしてアダムではなくエヴァを誘惑と狡猾の対象として選んだのであろうか。それは男女の人間性ではなく、本然徳力の性能とその機能の違いにあると思われる。女性は普段男性より優しい相手であり、あまい言葉、運命と幸運の話、称讃、面白くて不思議な話に興味津々で乗り易い。さらに、圧力、押し売り、悪質商売、簡単で余り努力を要しないテレビショッピング、篤誠的な態度に引っかかり易いし、新しさと流行、大胆さと成功、独占と幸せ、寛容でやさしい言葉と人柄の善さ、称讃と見方、恋愛と恰好という相互関係の論理に男性よりも女性の方が騙され易いのも事実である。特に健全でしっかりした信

念と世界観がなく、落ち込んで寂しい女性達は魅力的な幸運の蠱惑力に弱く、努力を要しない福利に走り易く、素晴らしい未来を予感させる魅惑に乗り易いのである。

では、狡詐的な凶悪と謀略の専門家である悪魔は如何なる芸、手順と罠をもって特恩の境遇を享受していたエヴァを誘惑し、墮罪の罠に誘き寄せたのか。この巧妙な蠱惑術と作戦には次のような要素が見受けられる。

まず、エヴァが一人でいる時を見計らい、証人のない二人だけの場をつくって近づく。

次に、始祖だけではなく現代人にとっても極めて魅力的で人間の誇りを揺さぶる最強の超能力、つまり「人の神格化」という課題を持ちかけ、エヴァが堪え忍びがたいほど彼女の好奇心を引き立てる。

第三に、「園のどんな木の実も食べてはいけない。食べれば死ぬことになる」と脅迫とも受け取られる神の禁止令によって彼女とその夫が置かれている微妙で差別的(?)な状況に深い理解を示し、親友のように同情の念を表わし、「それは本当か」と言って問題解決に知恵と力を貸す構えを見せるが、自分の正体と名前を明らかにしない。

第四に、エヴァの聞き手の最初の言葉を聞くと、神に対して敵意や対抗どころか、苦情や不平の気配が全く感じられない。却って、神に対する篤孝、全面的な信頼、敬意の雰囲気、神令の弁護とその称讃の姿勢さえ窺われる。彼は神の禁止令の真意を親友のように篤辨しているという印象も受ける。

第五に、自らの正体を全く明かさないう聞き手は「園の奥にある〔善悪を知る〕木の実だけを食べてはいけない」という神の禁止令の内容とその主旨を何気なく平気で「**園のどんな木の実も食べてはいけない**」という禁止令に摺り替える。その後は何もなかったように、神やエヴァに対して一言のお詫びがなく、神令の冒瀆罪に当たる「**内容と主旨の摺り替え**」に対する痛悔の気配もないままエヴァとの会話を続ける。そして、エヴァの訂正をも明らかに無視する。この八方美人的な聞き手の文脈、その調子と内容を冷静に分析してみると、神に対する敬意や始祖が置かれた状況の理解どころか、神に対する極限の憎嫉を隠しえない無礼で念の入った中傷、陰湿的な咎めと真赤な大嘘が読み取られる。アダムとエヴァを創造し樂園に住ませた恵愛の神が何と一転して、「**園のどんな木の実も食べてはいけない**」という無責任な禁止令を出し、無実な彼らを陰湿的に餓死させようとする誠に冷淡で残酷な存在として紹介される。

第六に、エヴァの聞き手の策略はここで終わったのではない。「**《この木の実を食べたりやそれに触れたら死ぬことになる》と神は言われた**」というエヴァの誇張的な訂正に対してこの聞き手は「いや、そんなことで死にはしない。お前達はその実を食べれば、その時に〔お前達の〕眼が開け、善と悪を知る神々(eritis sic-  
ut dii)のようになると、神は知っているのだ」という出鱈目でたらめを平気な顔で最高無上の叡智者のように主張する。ここに展開されている論理の中で神がアダムとエヴァを初めその後裔である全人類の最高人権とも理解されがち「**人間の神格化**」と「**神と人間の平等化**」を妨害し、「**人間の悟智的な向上と進歩**」の最高の敵であり、神令が人間的な生命の絶滅をもたらす暴慢であり、人類の栄光とその至福達成を不可能とした神の一方的で惨い決定として示されている。100%に自由で無償の恵愛と責任を持って宇宙万物に命を与え、天使達にも人間にも特別な恩寵の故

に特別な能力を恵み、各々の本性に循応した秩序、道理と掟を施した神は別な箇所では天使界、ここでは「人間界の叛逆者」として、「最大の敵」として、「根本人権の破壊者」として、「智的発展の悪徳妨碍者」として万物の内が一番素晴らしくて賢く、自分の本名を明かさないう悪魔の化物によって全人類代表者の法廷に訴えられたのである。エヴァの聞き手はここで初めて自分の本性と正体をさり気なく明かした後、静かに姿を消して彼女を独りにしたのである。

創世記は名を名乗らなかったエヴァの聞き手が場を立ち去ってからエヴァが木の実を食べるまでの事を詳しく説明しない。しかし、独りっぽちで残されたエヴァは自分達を神に変え、神と等しい善悪の識別力をもたらす「その木の実がうまそうで、見ても美しく<<〔自分達の〕眼が開け、善と悪を知る神々 (erimus sic-<sub>ut dicit</sub>) のようになる>>〔という〕成功を勝ち取るには望ましいもののように思えた」のも否定出来ない事実である。そして、エヴァは「その木の実を取って食べた」のである。孤独の心細さと侘しさの不安のうちに不思議な聞き手が残した「君たちの眼が開け、善と悪を知る神々 (erimus sic-<sub>ut dicit</sub>) のようになる」という最後の言葉を頭の中で思い巡らしていたに違いない。そして、彼女にとって自分が全智で全能の女神となり、愛する夫も同様に男神となりという輝かしい事実の展望と予告が如何に魅力的であり、今まで実感した事もない想像を絶する新しい現実が眼前に迫ったのである。隔越で神聖と真正な恵愛の窮まりない神との今までの親しい交流の歴史に心の眼を向けて、この魅力的な未来を断念して諦めるどころか、何としても断乎してこの新願望を実現させるために今こそ最適な機会であり、思い切った決行の時であると想ったに違いない。さらに、自分より先に創造された夫ではなく、自分が夫を越してこの上もうない神的な境地を獲得するという想いの蠱惑は益々エヴァの我慢を裂き砕き、引返す心理的な余裕の諸橋を次々と全壊させていたのである。彼女に残された空前絶後の自己神格化の妄想的陶醉の歯止めの最後の機会、つまりアダムに相談するという手段に気づく精神的な眼力もその余裕も全くなかったのであろうか？ 今の我々と違って、素晴らしい諸徳力性能、特に最善真理に趣く自由意思の強さと先ほど述べたように神との親しい交流の生記憶がエヴァの心にあったはずである。心身共に正常である限りにおいてどんな内外的な圧力があっても、自分の存在の恩者と最愛対象のためなら現代の我々でさえ自分の自由意思をもってものごとを選択し、決断する事が出来るのである。

ところが、神様は一体、楽園に住むべき人類に何を禁じ、何を求めたのか？ 神はアダムとエヴァを初め、楽園の生活を楽しむはずだった人々に御自分以外の存在を神格化したり「神」と見なしたり、人間を始め、他の被造物をこの神に等しい存在として扱ったりする事を禁じ、御自分の無上絶対性を認め、その全能全智とそれを本末とする秩序およびその諸理法を素直に容認することを要求したのである。換言すれば、神は御自分の無償恵愛と無辺際智の故に創造した一切世界とその万我物事象の自然で必然的な秩序、即ち被造物の創造主として、最高で無上の君臨主および神聖にして絶対不可謬で侵すべからざるの權威として是認するのを求めた。その上に神は無限で永遠の隔越者たる自分を有限の存在者たる人間の単なる仲間、天敵、敵意の対象、批判や自己本位的で自己満足的な欲望暴走の踏台としての扱い、又は他者や他物を御自分より上位に置く事を禁じたのである。要するに、神様は我が始祖に唯一神を唯一神として、天使を天使として、人間を人間として、動物を動物として、植物を植物として、神旨を神旨として、上位を上位として、下位を下位として、被造

**物を被造物として、善を善として、掟を掟として素直に当然で当たり前な秩序として認め、そうした永遠普遍で真正不偏の秩序に遵従して生きることを要求したのである。**

ここで説明をしている「始祖の自己神格化」という出来事は単なる古代や比喩的で抽象的な作り話ではない。帝王を初め、国の指導者、党の主席、自民自宗、自国優越主義、戦犯、自利絶対主義、自己恣意主義や他者を無視する独正独善主義を神格化する試みは人類の発祥から今日に至るまで地球上で行なわれている。記憶に新しいものだけを挙げると、西洋ではニーチェ<sup>(AD.1844-1900)</sup>が世界の真中で愛ではなく、町の広場で『おれたちが神を殺したのだ』と叫び「神の死」を最高に喜ばしい便りとして宣言した。そして、自分のような人類の巨人の叡智とその業の偉大さに陶醉しながら『おれたち自身が神々とならなければならないのではないか』と声を張りあげて「神様より神らしい巨人」とその新時代の新秩序の到来を人類に告げたのである。東洋では、日本の天皇制は明治維新から太平洋戦争の終結まで天照大御神の唯一で直血の子孫と見なし、不可謬で『神聖にして侵すべからず』の存在である現人神的な天皇を崇拜し、日本人を世界中で最優秀で単一民族と観ている「神国思想」を軸とした世界秩序の普及に取り組んでいた。ニーチェの超神的な巨人社会と日本的な天皇制の誕生と共に、唯一無比の神仏より崇拜され敬愛されている優生人種や素晴らしい国民（Great Nation）、不可謬的な国家や政党、神聖にして侵すべからずの者として仰視される指導者、新興宗教の教祖達、種々雑多の古い師達や霊媒師達、秘伝真智とその秘儀の大師匠達、そして彼らの栄光を反映する億万長者、スポーツマン達とアイドル達の神格化と輝かしい新時代の到来が人類の眼前に迫っている。

最近も自分の正体と本名を明かさない黒幕的な勢力は特定の個人、政治団体、国家体制、新興宗教、マスメディア、強力な政教結社や経医界の支持を受けている芸能人、スポーツの男神と女神達、拒神拒仏論者や民族優越主義者を神聖にして批判すべからず、不可謬にして異議を発すべからず、一切の善美德を本有する存在として公私生活における正邪と善悪の最高規準に押しあげる風潮がある。それらの者は人鬼の精神的な理想のほとんどない人々、特に若者を恣に動かし、洗脳し、偽善的に騙し、快樂、栄利と拒神拒仏主義の奴隷にし、悪質的に魅せながら精神的にも経済的にも搾取する。本音と立て前および言行を変えながら自分の正体と本名を明かさない現代の八方美人的な「ヘビ」達は誠意をもって生きようとする善意の者、特に愛神愛人、敬仏慈人や敬天仁人の正道を歩もうと努める人々を狙っている。彼らは終生誠実な心身正道の人々、特に正伝キリスト教の信奉者の「不自由」に深い理解とその掟の「<sup>くびき</sup>軛」に同情を示し、新人類に相応しい生き方と完全に自由で自主的な真福を一刻も早く勝ち取るように親友の助言、資金、賞讃と名声増大を惜しまないのである。彼らは先ず、独りぼっちや人生に絶望して落ち込んでいる正直者に近付き、魅力的な野望を提供する。次に自分の正体、本心と所属を明かさないうままで親友として優しくこの可哀想な信者を助けようとする。さらに、正伝キリスト教や正伝仏教が妨げる世界平和、民主主義、種々の自由、各種の平等、女性の権利、国際協力、社会福利、経済改革、福祉促進や愛国の心を自らの心として示し、気楽な生活、幸福や確実な儲けをもたらす救い主達として四方八方に声を張り上げている。そして、**唯一神の御独り子であるイエズス・キリストが示す愛神愛人のような古くて非現代的な生き方ではなく、自他倫理を要しない入会、僅かな会費、自由な御布施、自己本位的な欲望の追求、**



金の力と恣の行動という科学的に証明された最新最先端で流行に副った生き方によってのみ自己開発、自己完成と真福だけではなく、「無仏的な成仏」や「唯一神の秩序から解放された天国」の獲得も保証されていると現代万民のヘビ達は一団となって一齐に断言した後、イケメンの化粧を変え、今までの賞讃を止め、支援を打ち切って姿を消すのである。

アダムとエヴァは落ち着いて、『お前達がその実を食べれば、その時に〔お前達の〕眼が開き、善と悪を知る神々 (eritis sicut dii) のようになると神は知っているのだ』という文の真義についてちょっと考え、話し合い、正体を明かさず本名を隠していた者を信用するよりもおそらく毎日夕方の『そよ風の時、園を歩かれた主なる神』の方を信用し、その御心の戒めを素直に容認して守っていたならば神が彼らとその後裔に恵んだ優遇を楽しみながら「正善」の生き方のみを体験していたであろう。一方、「罪悪」と神の特恩のない生の人間性とその大特徴である病死と苦勞、差別と暴憎、心身的貧困、搾取と殺しあい等を知らなかったであろう。しかし、エヴァが自他神格化とその永福光榮の魅惑に身と心を任せ、自分達を宇宙万物の主であり、唯一無比の存在者である神と同等の女神と男神に変成させる『木の実を食べ』、夫も最高の親友と最愛の妻と同じくこれを食べたのである。その時に彼らの眼が開き、「神々ようになった」どころか、自分達の人間性の「裸」、つまり神愛の特別な恩力とその機能を失った人間性、特に神戒無視の羞恥、良心の呵責、劣等感、性欲の恥じ、心の弱さ、惨めさと自分の無責任を悟ったのである。ところが、アダムもエヴァも自分の生で裸の人間性、特にその死と不滅、貴賤と貧富、強弱と長短、真善と罪悪性、正邪と迷悟の禍福的な性向および神が無償恵愛の故に直ちに始動させた人類救済の計画に何時気づいたのであろうか。彼らは人間が神仏そのモノに永遠に成り得ないこと、人間と神仏が永遠に不平等であること、そして人間が神仏に絶対に打ち勝つことが出来ないという永遠不顛倒の事実を自らの人衆体験を通じて悟ったに違いない。さらに、その事実は始祖だけではなく、万代万人の人衆の中で立証されている。太古の昔も今日も、東洋でも西洋でも「唯一神が死んだ」のではなく、ニーチェと彼のような者同志の心の中で宇宙の現実と人間の真福を把握出来る正眼が徐々に霞み、そして眩んだあげく消失してしまった。彼らの内外が暗闇に満溢されたことによって彼らは自他の真相、その位置、人衆の価値、真愛、唯一の神仏、その恵愛、御摂理と人衆の方向づけがみえなくなり、自己本位的な内籠りの時が経つにつれて忘れられ、神福光界の実存とそこへの路が空前絶後の妄想にしか観えなくなった。さらに、眼識の回復と神愛による罪の赦しを語るイエズス・キリストの福音も理不尽に聞こえ、神福参加も不可能となった拳句、超神的な女神と男神として自栄自讃の孤独な「死への存在」のみが人生至福の蠱惑力を放つようになったのである。

始祖は一切の主なる神におそらく毎晩、そよ風が吹いた時に喜んで御目にかかり、親しく語り合ったに違いない。しかし、唯一神に等しい者になるというとんでもない大挑戦に完敗し、特別な神授を全部失った後、叛逆的な罪の意識と良心の叱責がなかったならどうして今までと違って、近づいて来られた神の気配を感じて恐くなったのか。どうして全智の神の御前で自分達が「男」であり、「女」である事に恥を覚え、それを隠そうとしたのか。御自分にかたどって人間を創造し、無償の恵愛をもって人間的な本性をはるかに超える徳力と境遇を賦与した神にどうして始祖は突然会いた

くなかったのか。宇宙万物の主たる神を避けようとした彼らと同じ行動を取る或る現代人は一体、何所で自分の人毘を全うし、永遠無尽の神福参加の外により素晴らしい、より安心できる慶福を何処で見つけるのだろうか。始祖も現代人も、汝も我も、全知全能にして何時も何処でも現存し、すべてを隔越しながらすべてを生かす恵愛の神から遠ざけようとしても何処へ逃げるのか。神の心を伝えている聖書によると、この神は始祖に向かって『どこにいるのか』と呼ばれたのである。アダムもエヴァも神からの叱責が死ぬほど怖かったに違いないが、やはり応答して神の審判を受けるのである。だが、神は一切の罪惡の源泉、特に悪質的な勢力の化身である悪魔（エヴァの 闇き手）の名を呼ばないままで彼を嚴重に処罰すると聖書が記す。同じ神は人類の歴史の中で様々な方便を用いて人間一人一人、汝の名も我の名も呼び続けているのである。無償慈愛の神はきっと、「ニーチェ君、どこにいるのか?」、「本居宣長君、どこにいるのか?」、「ヒトラー君、どこにいるのか?」、「ヒロヒト君、どこにいるのか?」、「東条英機君、どこにいるのか?」、「平沼騏一郎君、どこにいるのか?」、「スターリン君、どこにいるのか?」、「毛沢東君、どこにいるのか?」、「H.S.トゥルーマン君、どこにいるのか?」、「ポルポト君、どこにいるのか?」、「G.W.ブッシュ君、どこにいるのか?」、「小泉純一郎君、どこにいるのか?」、「キム・ジョンイル君、どこにいるのか?」…と呼び、「君達は、何ということをしているのか」と問い続けていたが無視されたようである。

『何ということしたのか』と神はエヴァに問いつめると、『へびが私を騙した』という答えで自己責任を転嫁しようとした。アダムも男らしく妻を弁解するはずなのに、一先ず彼女に責任を転嫁した後、何と、神に対し、『あなたは私に下さった女があの実をくれたので私も食べた』<sup>(98)</sup> と言い返し、自分の罪の責任を神に負わせるのである。現代全世界の凶悪犯罪者を初め、悪徳弁護士達も悪徳裁判官も、文化科学省も警察省の責任者達も、社会秩序とその福利を法制化する諸国の国会代議士達もそれを執行する諸国の内閣大臣達も、政教も経医の権威者達も、犯罪者の親もその教育者達も同じ論理を展開し、政教のおよび経医的な罪惡の責任を逃れることが出来ると勘違いをしている。

始祖を陰湿的に騙し、今も拒神拒仏主義を愛する人々と同盟を結んで活動する「へび」に向かって神は『お前はすべての生き物の中で呪われたものとなろう。お前は生きる限り腹這い、塵を食うことになるであろう』という判決を出した。へびに対して下された処罰は「蛇」という動物に対しての刑罰ではなく、「へび」が象徴する諸悪、特に唯一絶対神を否定し、自分や他の被造物を絶対者と仰視し、神の無償恵愛とその秩序を愚痴と束縛と決め付け、それを自己恣意的に破壊しようとする諸勢力の諸罪惡に対する神の不偏正義の執行である。それ故、諸悪とその諸勢力が被造物の中で最も嫌われたモノとなり、「罪惡」として永遠に侮辱され、屈辱のままで全滅されるということである。さすが、良心のない現代人でさえ、極悪の体現と見なされる戦争と戦犯を「悪」や「悪人」ではなく、「侵略の先行防衛」、「民主主義導入」、「お国のため」や「神仏のため」と名づけている。やはり悪は悪として憎まれている。

又、神は人類の歴史の中で悪と悪人は善と義人に絶えず挑戦するが、最終的にアダムとエヴァの後裔が救い主として悪とその諸勢力を必ず滅ぼすであろうという明るい展望で満ちた約束を彼らに告げる。そして、最後に神は『見よ、人間は善悪を知ったので我々〔つまり全能全智の神〕のよう

な者になった』と皮肉の言葉を発し、始祖に恵んだ超自然的な優遇の諸能力を取り下げ、人間性に属する徳力性能のみを残した後、樂園から追放したのである<sup>(99)</sup>。人間が本来、人間として有すべき境遇に差し戻されたアダムとエヴァは苦勞して土を耕し、カインとアベルを初め、多数の子どもを生み、人間として親として、家族として、兄弟間の殺害という極めて哀痛な出来事を経験することになる。しかし、アダムもエヴァも神を批判したり拒絶したりする事がなければ、二度と神から逃げようとしなかった。弟を殺したカインも最初に神が彼の殺人行為を知らないと勘違いをするが見破られていると悟った時に、神から謝罪を求められるのではなく、自ずから『私の罪が赦しがたいほど大きい。...私は御前から遠く離れて身を隠さねばなりません。私は大地の流浪人となる』<sup>(100)</sup>と殺人罪を認め、反省の意を表す。ここも神はカインを罰するが、アダムの家族もカインの家族も、全地球に散らばって生きる諸後裔をも今日に至るまで見捨てることなく、一人一人の心と行ないに応じて扱っているのである。

ここで論解して来た「始祖の自己神格化」の試行をよくよく考えて観ると、それは最初から非現実的な目標だっただけでなく、一切世界とその万我物事象の究極の親であって唯一の絶対者でもある神、特にその無限全智と無償の恵愛に対する極めて軽率で陰湿的な行為であり、神の永遠不可得で神聖と隔越の極まりない地位への極めて愚かな挑戦であったと認めざるを得ない。この叛逆の兇悪性とは神の無限正知の否定、神の恵愛的な決定に対する不信と不従順、神ではなく神を軽蔑していた勢力への全面信用と追従、神の智慧ではなく悪魔と自分の知慧を上位に置くこと、つまり絶対神を踏台にして自分が上位の神となる試行にある。このような公然たる叛逆が錯誤的試行であり、成功の見込みも永遠にゼロであると言えども、在りとあらゆる存在とその命の創造主に対する極めて陰湿的で悪質的な叛逆であるからどう考えても絶対に許す訳にはいかないし、それを惹起した勢力を自然で必然的に罰しなければならない。人間界に置いて最大無上の罪である「自己神格化罪」を神は嚴重に罰するが、この場合も神は始祖を壊滅させるのではなく、無償で無尽の慈愛を持って特恩の能力だけを取り下げたのである。かくして、神による処罰がアダムとエヴァを初め、彼らの後胤である我々の人間性とその能力に致命的な害傷を及ぼせなかった事は不幸中の幸いである。そして、キリストによると、その出来事は神愛の新計画、つまり人類の救済の因縁となったのである。我が始祖の「自業」であるこの自己神格化の試行を「**人類の原罪**」と称じ、唯一神の慈愛によって現世の人笥に留まった「自得」と正義の処罰、人間性の負傷、優遇の撤廃、天然徳力の虚弱化およびその後遺傷を「**人類の墮落**」と呼ぶのである。始祖の自己神格化の試み、神法に逆らう意思の新趣向とそれによって人間の天然性質に來たされた損傷が万代万人に受け継がれ、現代に至っている。現代人間界の実状を考えて観ると、人間精神と科学技術の発展にも拘らず未だ各地の人々の苦悶苦境、義人と弱者の苦難窮状、個人的だけではなく国家ぐるみで行われる神仏の拒絶とその秩序の蔑視、無防備な人命の多量殺害、国民間の憎嫌と復讐の合戦、金銭と富の神格化と崇拜およびそれらの現実に対する政教経医界の恐ろしい無関心は人類の原罪性、墮落とその後遺傷でなければ何ものであるか。

## 5. 人間, その靈魂, 本然性質と禍福的な性向

キリスト教, 特にカトリック系の哲学とその主流であるスコラ学派は人間<sup>(101)</sup>を, 「身魄」を含む人間的な肉体とそれを生かしながら統制する人格的で個性的な靈魂の一体と見なす. ここに言う人間的な肉体又は人間的な身体とは無機物質, 無機物体, 植物的や動物的な身体, それらの諸感覚と機能だけを持つ肉体ではなく, 「人格的な者」に相応しい諸感覚とその機能を本有する身体のことである. ここに言う「身魄」とは人格的な身体とその生理的, 神経的と感覚的等の諸機能を統制する肉体の生物学的な勢力のことである. しかし, 人には人体とその生物学的な勢力を超越する面, 非物質的な側面, つまり精神的な徳力性能とそれらを統制する**靈知的で個性的な本力**が認められるのである. これを「人魂」, 「人我」, 「人格的靈知力」又は「人格的靈魂」(*anima humana*)と称する. この人魂こそは人間的な心身, その存在, 諸徳力とその諸性能を生かしながら維持し, 養濡しながら統制する力である. さらに, この人魂はあらゆる物的又は動植物的な生命力と根本的に異なる勢力であり, 人間性を成す徳力性能の類似面と各人特有の個性を成す唯一無二の面を本有する靈知的な個我として理解されている.

聖トマスによると, 人魂が無機の物質や物体でなければ, 有機体や植物の存在とその活育の原動力, つまり自育的魄 (*anima vegetativa*) 又は植物的魄 (*anima floralis*) と称せられる生命力でもなく, 動物の存在, その非理性的な活育と感覚的な機能の原動力である感覚的魄 (*anima sensitiva*) でもない. さらに, 人魂は人体とその諸感覚の性能を養生しながら統轄する魄でなければ, 人体魄やその生理的, 神経的や感覚的等の機能の遺伝的な化育, 進退, 融合, 偶然的な混合又は変成の産物, もしくは一時的な合一ではない. 人魂とは人体魄を初め, 人格的で個性的な生命の実存, その感覚の諸機能および精神的な徳力性能とその万変千化の非物質的, つまり**靈知的な第一源, 究極原理と根源的な原動力** (*Primum fundamentalisue principium vitae personae*) である.

この人魂, つまり人格的な心身とその諸徳力性能を生かしながら養生する靈知的で根源的な生命力は人体とその魄の諸徳力と性能を超越する異性的な妙力であると同時に人間的な肉体とのみ合一出来る天然性向を有する不可分の単一者であり, 物質の混じり気のない靈知的人格者 (*persona humana et spiritalis*) である. 更に, 人我とも呼ばれるこの靈知的な人格者は自他を意識しながら内的な自由意思を本有し, 自分を内制しながら自分を律する主権者でもある. 又, この人我は人体との一体化への本性的な趨向を有すると同時にその存在において人体に依拠しない自立的な靈我である. 又, 人魂はこの世において人体と「一つ」(*ens unum*) を成すことが人体の本性にも自分の本性にも循するが, 人魂は人体の為に存在しなければ, 人体が人魂を生かし養うのでもなく, 却って人体は人魂の為に存在 (*anima utens corporem*) するのである. そして又, 人魂は自性を損失せずに自分の徳力性能を存養しながら統制すると同時に人体とその諸活動も生かしながら養う第一の形相, つまり個人全体の根源的形相 (*forma prima humana*) である. 人間一人一人には一つの靈魂しかないが, その靈魂には生物的, 自育的, 感覚的と靈知的な諸徳力とその性能が含まれている. しかし, 人魂の本然自性を決定するのは生物的, 自育的や感覚的な徳力性能又はその原動力たる魄ではなく, あくまでも靈知的な徳力性能とその原動力である. さらに, 個人の内には自育的個魄, 植物的個魄, 動物的個魄と人格的で靈知的な個魄が仲良く共存しながら活動する別個でなければ, それらの魂魄の連合体, 混合体, 融合体, 統

合体や合一体でもなく、霊知的人魂が自分より下位の徳力性能を活用出来る力を本有すると聖トマスは考えている。人魂は個人の存在とその諸活動の原動力であり、個人の徳力機能全体の根本形相である以上、その一部分である心臓や頭脳等だけに内在するのではなく、個人の生命とその徳力機能の全次元の形相として心身とその徳力機能の本性に順応してそれらを生かしながら形成し、統轄しながら活性化するが、その為に一定した空間的な場所を要しない霊妙な生命力である。しかし～

聖トマスと違って、私は霊的な単一者たる人魂が個人の一定した所、例えば頭脳の中枢を「通じて」個人のあらゆる次元を生かし、活性化し、統制するという事が人魂の本性とその諸活現を防止する事がなければ繫縛をする事もないし、人魂の人体との一体化への天然性向を考えると尚、十分に可能であると思う。

更に、各人の靈魂が唯一であって同じ二つ目の人魂は存在しない。この唯一性とは各人靈魂の天然本性とその徳力性能が他者靈魂と全く同じ本性を有したりや他者人魂に依存したり、又は他人に自分の靈魂を譲ったりや貸借したりすることが出来なければ、他者と靈魂を交換したり、一時的に交代したりすることも出来ない。つまり、人魂は各々の天然本性において非共有的で非共通的、独立的で自立的、譲渡不可能で外部から不可侵的な存在者 (*incommunicabilitas naturalis individuae animae vel personae humanae*) である。

尚、言うまでもなく、各人にとって極めて重要で非常に興味深い出来事、つまり「**人とその人魂の誕生**」という課題である。何故かと言うと、それは夫婦関係、親子関係、兄妹関係、それらの役割、真相とあるべき姿を決定し、人の生死苦楽等の経験、教育等の人間的関係の意味とその価値を示現しながら各自人魂の禍福的な道を方向づけ、個人にとって一回限りの出来事である。以下、聖トマスの見解を軸にカトリック立場の要を撰述する。

創世記は人間始祖の身体とその靈魂の創造についてこう語る。

『神が地のちりを取って人〔体〕の形を作り、その鼻の穴に命

の息吹を吹き込まれた時、人間は生きるものとなった』[2章].

ここに言う「命の息吹を吹き込まれた」という語句は個人生命の源泉であり、人体の生存とその諸活動の第一の原動力であってその存養主、つまり「命の息吹」である人格的で霊知的な命我がアダムにもエヴァにも神から直接に賦与されたとキリストの時代から一貫して解釈されている。しかし、神は「生めよ、増えよ、地を満ちよ」と仰せられた後、アダムとエヴァの子ども達以後に如何にして個人的な靈魂が発出するのであろうか。言い換えれば、我々一人一人の靈魂は両親の胚芽 (embryo) から生出 (generatio) 又は産出 (productio) されるのか、両親両魂の交合によって生出又は産出されるのか、神御自身によって直接に創造されるそれとも、先ほど述べた方法の組み合わせの結果であるのかという問題である。

まず、人間の卵子と精子の核の結合によって生出した胚芽が生きものであるが、個人の非理性的な心身とその徳力性能の遺伝しか内含されていないので霊知的な人魂を産出したり又は生出したりするのは不可能である。何故かと言うと、万我物事象の生成千化の普遍で永遠の道理である「因果法」によると、動因とその環境が本有しない徳力性能を譲渡したり、果として生出したり又は発出したりすることが出来ないからである。よって、両親の人胚に内在する遺伝から子どもの人体とその物質的、生理的、神経的と感覚的な諸徳力とその機能の能所、つまり非霊知的なものしか生成

されないのである。

次に、男女の交わり前中後に彼らの人魂の交合に因って子どもの人魂が産出され得るのかという問題である。今まで人魂の本然自性とその根本徳力について説示したところによると、各人の靈魂がその天然本性において不可分的、不可侵的で非共有的であり、譲渡や種々の結合を不可能とする単一者である以上、男女個魂の本性的な交合、融合、混合、交換、交代や合一があり得ないし、その分割分離、新組み合わせや変成も不可能であるという事は自明の事理である。さらに、それらの事柄を人類の普遍的体験を土台にして考えてみると、各人の靈魂自体とその特有性能が父母の人魂自体とその根本性能である靈智的徳力と自他認識の融合、混合や合一でなければ、部分的な交換、交代又は分離の結果でもない。要するに、人が自分の意思の内容をなんらかの方法で相手に伝えなければ相手はその内容を現世において永遠に知識する事ができない。かくて、我々を生んだ両親は我々の靈魂ではなく、身体とその諸徳力性能のみの「**生みの親**」であり、我々も当然我が子の人魂ではなくその身体とその諸徳力性能のみの生みの親である。よって、精神教養に無関心で真の宗教に無頓着、特に正伝キリスト教的な教育を疎放又は禁止した社会と正反対、正伝キリスト教の人間観において子どもが親の産物でなければ、親の所有物、財産、玩具やペットではない。子どもは親から肉体とその諸能力を遺伝として貰ったと同時に親に全く依存しない、親と等しく自立で独立した唯一無二の靈魂を親より上位の存在から直接に頂いたとキリストの時代から一貫して説かれている哲理である。では、父母の人魂及び人間的胚芽の万力だけで全面的に自立、100%に独立で全く異なる個性を持つ新人魂の発生が不可能であれば、新しい人魂創造の道しかないと正伝キリスト教の聖哲が考えた。そして、全く新しい非物質的で靈知的な人魂を全能で靈智等の窮まりない徳力と性能を本有する唯一神しか「**創造**」出来ないということで、神の直接的な介入、つまり100%新しい人魂の創造を認めることに至ったのである。こうして、我々一人一人の靈魂が我が両親の意図や賛否と関係なく、我が肉体が生まれると同時にその靈魂も神によって創造され、その肉体の使用者と主権者となるのである。人格的胎児の生成化育とその靈魂の創造について聖トマスはこう説篤する。

『(人魂は) 非質料的 (で非物質的) な実体 [ここに言う「**実体**」とは全く変化しない固定した物体の如きではなく、個性を本有する単一的な存在者] であるゆえ、[肉体の] 生出によって原因されず、ただ神による創造によってのみ原因されることの出来るものなのである。…我々は、[個人の] 魂は最初は栄養摂取的魂として、そしてその後は感覺的魂として、予め胎児の中に存在しているのである、としなくてはならない。…(人間の) 魂は身体の生まれると同時に創造される』<sup>(102)</sup>。

しかし、聖トマスは『我々は、[個人の] 魂は最初は栄養摂取的魂として、そしてその後は感覺的魂として、予め胎児の中に存在しているのである、としなくてはならない』という文の中で人間の胎児期中に先ず植物的な魂、後に感覺的な魂そして最後に理性的な魂が順番に発生して共存すると主張するのでなければ、植物的なタマシイが動物的なタマシイの段階を経て靈知的な魂にまで進化するという「**人魂進化論**」を提唱するのでもない。前に述べたように、聖トマスは植物的なタマシイ、動物的なタマシイと靈知的な人魂は天然的に異性であるという立場を採っているのです、**非靈知的個魂**に過ぎない動植物的なタマシイが靈知的な人魂にまで進化したり又は変成したりするとい

う事をこの箇所て教示する、と解釈するのは無理がある<sup>(103)</sup>。『我々は、〔個人の〕魂は最初...としなくてはならない』という文脈の中で彼は人間的な卵子と精子の核の完全な融合の瞬間に神が完全で靈知的な人魂を創造して賦与するが、その人魂の靈知的な徳力と性能の全面全機は直ちに最初から活現するのではないと明示するだけである。しかし、この魂は人間的な卵子と精子の完全な結合の瞬間から植物的や動物的な魄ではなく、確実に100%で人格的で靈知的な個魂である。その理由が簡単であって証明も自明である。人類の歴史において人間的な受精卵からオラングータンや日本猿が生まれた事がなければ、パンダやチワワも生まれた事なく、あぶら虫やアメーバーでさえ一度も産まれたことはない。そして、ゴリラや猫の受精卵に幾ら王宮の栄養を摂取させても人間的な赤ん坊として誕生する事はない。よって、『我々は、〔個人の〕魂は最初...としなくてはならない』という聖トマスの文は最初から完全に靈知的で人格的な個魂が先ず、自性の内に本有する「栄養摂取的」な徳力と性能、次に自性の内に本有する「感覺的」な徳力性能、そして最後に、自性の内に本有する「意思的」な徳力と性能を活用し公現するという意味である。換言すれば、人間的胎児の魂が進化的な化育発展ではなく、先ず神によって完全な人魂として創造される時に人格的と個性的な徳力能所を全て賦与されるが、その心身の化育発展において段階的にその能力を活用しながら示現する。又、父母から授けられた心身の化育と発展の経過において不全や障害が生じた場合は人魂の徳力や機能が十分に発揮されないこともある<sup>(104)</sup>。しかし、『生めよ、増えよ、地を満ちよ』という万有の創造主たる神の思し召しが暗示するように、神が「子どもの靈魂伝達力」を各人本性の一方として賦与し父母に委託したと考えても、それも人間性に矛盾する事がなければ全能の神に出来ないこともない。却って、**各々人魂の神秘を深め、子どもの生命価値とその使命に対する親の責任を一層高め、絶対神たる創造主の恵愛の力量と人間の肖像性をより明確に露顕すると私は思う。**

ここまで説示してきた人魂の有限的な靈質性、単一性、唯一性、不可侵性、自他認識力、意思の自由および禍福的性向という天然本性の内に自他認識と一体を成す悟智力、意思の自由、決断力、決意実行力、内的不可侵性と幸福の切望は今生においても来生においても人の境遇とその改善又は改悪を決定づける能力である。被造物そして神の肖像としての人魂の本性とその固有性を明確に示現するものとして下記の徳力とその性能が挙げられる。

- 一、自他の実存、自他の境遇、自他の同異、自他の意思とその理法、自他の性向とその運命、宇宙万物の多様性とその道理、特に「因果法」と「善悪応報法」を認識する力。
- 二、真偽、邪正、善悪、損益、幸不幸、生死起滅とそれらの諸相を裏づけ、在らしめ、保持し、決定し、運営する道理とその本末である絶対神の実存に気づき、ある程度に理解できる靈知的な能力。
- 三、考察する、考察しないと考察内容等を変える自由。志意する、志意しないと志意的等を変える自由。真偽、正邪、善悪、損益と禍福等を決行する、しない又はその諸内容と価値を変える自由。
- 四、自分と或る程度までに他人の今生と来生の境遇を貴賤的で禍福的に作り上げる実力<sup>(105)</sup>。

〈続く〉

## 註

- (79) 『聖書』(旧約篇), *ibid.*, pp.5-7.そして, 'Biblia Sacra' (Vulgata), *ibid.*, pp.4-7を参照. 引用文内の〔 〕という括弧内の文は聖書や他の引用文献内に私は文脈を理解し易くする為に挿入した私的解釈語である. 同じく引用文内の( )という括弧内の文は聖書や他の引用文献内に私は文脈を理解し易くする為に挿入した同文献の語や外国語の表現である.
- (80) 『神学大全』, *ibid.*, vol.4, pp.322-330.
- (81) *Ibid.*, vol.4, pp.125-323, 331-426.
- (82) *Ibid.*, vol.8, pp.169-233. 福音書(つまり新約聖書)も善きと悪しき霊の介入, 誘惑や策略について語る. 例えば,  
 一, 洗礼者ヨハネの誕生を告げる天使ガブリエル(ルカ, 1.5-25)  
 一, イエズス・キリストの誕生を告げる天使ガブリエル(ルカ, 1.26-38)  
 一, キリストの誕生を羊飼いに告げる天使達(ルカ, 2.8-13)  
 一, キリストをヘロデ王の手から救うために天使のお告げ(マテオ, 2.13-23)  
 一, キリストを荒野で試みる悪魔(ルカ, 4.1-13)  
 一, 汚れた悪霊に憑かれた男を癒すキリスト(ルカ, 4.31-37)  
 一, 悪魔に憑かれた子どもを癒すキリスト(ルカ, 9.37-43)  
 一, 追い出された悪魔は新しい住処を探す(ルカ, 11.24-26)  
 一, 復活したキリストの墓内現れる天使(ルカ, 21.1-11). さらに, デュフル・X.L., 『聖書思想事典』, 三省堂, 1983, pp.622-624をも参照.
- (83) 『聖書』(旧約篇), *ibid.*, pp.5-8. フランシスコ会聖書研究所訳注, 『創世記』, 中央出版社, '1982 [ '58], pp.34-39.
- (84) 『神学大全』, *ibid.*, vol.7, pp.15-24.
- (85) *Ibid.*, pp.42-44.
- (86) 『聖書』(旧約篇), *ibid.*, pp.5-8.
- (87) 『神学大全』, *ibid.*, vol.7, pp.47-58. "Catechism of the Catholic Church" (省略CCC), Libreria Editrice Vaticana, Sec.Ed.1997, pp.73-105 (279条から-421条まで). 『カトリック教会のカテキズム』, カトリック司教協議会 [訳監], カトリック中央協議会出版, pp.87-129 (279条から-421条まで).
- (88) 『神学大全』, *ibid.*, vol.7, pp.59-60, 65.
- (89) *Ibid.*, pp.62-65.
- (90) *Ibid.*, pp.66-86.
- (91) 道元の禅仏教によると, 人格的な妙我の天然的な自性, 身心(身体と精神), その徳力と性能は永遠仏性の活現成の一端である普遍的因果法および業報法に遵じて命我の過去の諸行, つまり命我の自由, 善悪, 正邪, 迷悟の軽重と度合いに応じて, 「中有」中に改善又は改悪したり, 貴賤化されたりして新しい自性とその徳力性能および新身心受容への性向が完熟するのである. それによって生前の人我が成仏する又は輪廻各界で生まれ変わった場合に, 新しい境遇を持って次生の禍福を自らの手で作り上げているであろう. 詳しくは前著の『人間的妙我とその死後』, 『今生の善悪迷悟と妙我来生の禍福』および『中有を生きる妙我』を参照.
- (92) 『神学大全』, *ibid.*, vol.1, pp.49-140, 169-206, vol.2, pp.1-108, 126-211, vol.3, pp.81-324, vol.6, pp.83-373を参照.
- (93) 『聖書』(旧約篇), *ibid.*, pp.5-10.
- (94) 『神学大全』, *ibid.*, vol.7, pp.139-140, 149-150, 190-196.
- (95) *Ibid.*, pp.109-133, 152-161.
- (96) 東京都内にある靖国神社は天皇制, すなわち現人神的天皇を日本国家とその社会の基調と枠組みとし, 国民内の差別, 人種優劣主義, 日本民族優生主義, 日本の覇道政治を美化し正当化する政策の一貫として創設された神道の礼拝堂である. そこには善悪と正邪の行ないを問わず, 天皇と神国たる日本のために戦死した皇軍の兵士と1978年に合祀された第二次大戦(太平洋戦争)の日本のA級他の戦犯者は「英霊」と見なされ, 崇拜されている. 戦争責任がなく, 又は命令で徴兵に採られ, 戦場に送られた軍人の他に明らかに侵略戦争を企て, 命令し, 戦争中に自他国の無実や無防備な市民の苦しみの原因であり, 広島と長崎の爆弾投下の間接的な起因であるA級戦犯者と同時に軍部諸高官が真の意味において日本の「非国民」であるにも拘らず, 「英雄」視され「神格化」され, 公に祭られているという例は世界中でも他にいない. こうした事実を踏まえて, 先進国として高い教育を誇ると自讃する日本国の総理大臣中曽根康弘が1985年8月15日に公式参拝をした. 同じく善悪を問わず小泉純一郎総理大臣も中国, 韓国, マレーシアと国内少数の懸念, 良心の声と道徳の世界的常識を押し切って, 憲法の「政教分離」に反して2001, 2002, 2003, 2004年にも靖国神社を「日本内閣総理大臣」として, そして2005年に総理でありながら「個人小泉」として公式参拝したのである. 毎年揃って8月15日やその前後に靖国神社を公式参拝する閣僚, 議員達, 政治家や他の人々は太平洋戦争敗北と被爆の歴史から未だ何も学んでいないようである. 日本国民を代表する日本政府, 天皇制(神国主義と人間神化主義)の支持者と日本民族優生主義者による対アジア, 特に日中と日朝韓の過去歴史の歪曲, 侵略の正当化と戦争美化の再発に対して隣国の強い懸念と怒りも再び奮発してきた. 2005年4月8日付で韓国のノ・ムヒョン大統領はドイツの訪問の前にドイツの新聞とのインタビューで戦争精算に対するドイツと日本の態度と歴史認識の違いに関連し, 『侵略と加害の過去を栄光と考える人たちと一緒に生きるのは全世界にとって大きな不幸だ』と述べ, 又靖国神社参拝について『韓国はもちろん, 中国にも大きな侮辱を加えるものだ』という気持ちを語り, 日本帝国の侵略と植民地化の政



策に対する東南アジアの隣国民の本音を表した。そして更に、現代『日本の態度は人類社会が追求しなければならない普遍的価値にあわない。日本が過去に対して、何度か謝罪したのは事実だ』と述べると共に、『最近こうした謝罪を白紙化する行為を見せた』という事を強調して日本を厳しく批判する。[朝日新聞, 2005, 04.08]。私も最近の20年間に及ぶ日本政府と特に内閣の官僚や文部科学省の発言を観るとノ・ムヒョン大統領の見解が的を得ていると思う。更に、「平和主義者」と称せられ、「国民を愛する」と言われる昭和天皇も平成天皇もそれらの諸事実を黙認してきたのも非常に意味深い。しかし、冷静になってよく考えてみると、靖国神社を参拝している閣僚、政治家や他の者達が戦犯やその支持者の家庭で生まれたり、彼らの家族が戦争の被害者どころか戦争で大儲けしたりした者が非常に多い。さらに心の呵責なしに戦犯を崇拝する者は中露朝韓蔑視、民族優劣や人間差別の教育を受けたり、キ釈嫌悪とその陰湿的な苛めの雰囲気の中で育てたり、戦前中の政権政党の思想とその政策を受け継いだり、又は戦後で拒仏拝金、拒天拒愛、善悪識別の無視および自己本位的な私利私欲の絶対視とその追求を教える支離滅裂な倫理を最善とする文部科学省とその傘下ある国公私立学校の教育の産物であると解かる。もし、ドイツで Adolf Hitler, Joseph P. Goebbels, ナチの教主であった Ernst Krieck や他の戦犯者に記念教会を建てて大統領、首相や議員達は「彼らの御蔭で今のドイツと EU がある。感謝と不戦の気持ちで彼らの前で手を合わせます」と言って拝んだなら、隣国だけではなく、欧米、ロシアとイзраエル他の国民は黙って、そういう国と友好を深めたいと思いますか。しかし、韓国のノ・ムヒョン大統領は言ったようにドイツの指導者とその国民の戦争精算と歴史の認識が日本の歴史認識、侵略精算と誇りある国造りの方向が非常に異なる。「敬天愛人」(又は敬仏慈人)の道を歩んだ者と凶悪犯罪者が同じ報いを受けると説く宗教を国民の誇りと考え、戦犯者をも「英霊」と見なし、八百万の神々の仲間に加えて拝む国家とその代表者が国連の常任理事国の席についたら世界平和が堅持され、敬天愛人の社会造りも本当に速まるのであろうか。数十人を殺した AUM 真理教に怯え、「悪徳宗教」と見なす一方、自他国民の虐殺を遂行していた者達に敬意を表し、国民の英霊として拝む者達の「心」とその「宗教」って何であらうか。

- (97) 『聖書』(旧約篇), *ibid.*, pp.8-11. 'Biblia Sacra' (Vulgata), *ibid.*, pp.7-8.
- (98) 『聖書』(旧約篇), *ibid.*, p.9. 'Biblia Sacra' (Vulgata), *ibid.*, p.7.
- (99) 米倉充, 『創世記』, 人文書院, 1984, pp.51-60の解釈に魅せられて書いた章である。
- (100) 『神学大全』, *ibid.*, vol.6. pp.1-82.
- (101) 『聖書』(旧約篇), *ibid.*, p.11.
- (102) 『神学大全』, *ibid.*, vol.8. pp.302-303.
- (103) *Ibid.*, vol.6, pp.33-50, vol.8, pp.61-72, 303-306.
- (104) *Ibid.*, vol.6, pp.1-82, vol.8, pp.294-325. 渡辺義雄編, *ibid.*, 129-135, 153. 片山寛, *ibid.*, pp.80-84. デュフル・X.L., *ibid.*, pp.528-531, 605-612, 655-658. デンシンガー・シェーンメッツァー, 『カトリック教会文書資料集』, エンデルレ書店, 1974, pp.670-675 (人間の創造, 人間の本性, 神恵と人間の墮罪を中心に教会の根本教理が明示されている)。
- (105) 最後の公審判の時に救われた人々に対してキリストはこう言われるであろう:『私の父に祝福された人たち, さあ, 世の初めからあなたの方のために用意されている国を受け継ぎなさい...あなた方によく言うておく。これらの私の兄妹しかも最も小さな者 [例えば飢えていた者, 裸であった者...] の一人にしたのは私 (つまりキリスト自身) にしたのである』。そして, 救われなかった人々に向かってキリストはこう言う:『私を離れ, 悪魔とその使い達の為に用意された永遠の火に入れ...お前達によく言うておく。これらの最も小さな者 [例えば病気な者, 牢に入った者...] の一人にしなかったのは, 私にしなかったのである』。[マテオ, 25.21-46].